

《邪馬台国以後の日本》、を考えると、

「倭の五王の本拠は九州なのか？ 畿内なのか？」

「九州王朝はあったのか？」

が、避けて通ることの出来ない最大の問題である。

よってこの問題を、今回は《神籠石》から考えてみたい。

[1]

日本には奈良朝政権によって 700 年代初めに書かれた歴史書の『古事記』・『日本書紀』がある。しかしこの『記紀』は日本の統一を果たした近畿天皇家の王朝が《その正当性を主張する》という極めて政治的な目的をもって編纂されている。

すなわち『記紀』は、天上の天神(あまつかみ)直系の天孫が天神から《地上統治の権限》を与えられて九州の高千穂に降臨し、その直系の神武が奈良盆地に東征して第一代の天皇となったと《天皇家の由来》を説明する。そして、この《日本統治の権限》は天神から現天皇へと血によって受け継がれて来ているのだから、何人も侵すことは出来ない、と《天皇家の大義名分》を主張する。その上で、この天皇家の王朝が唯一の支配者として日本を統治して来たと《日本の歴史》を記す。

この『記紀』の主張のうち、《天孫降臨と神武東征の説話》と《天皇家の大義名分》は歴史学の対象から外れようが、これを除く「奈良盆地に生まれた王朝が唯一の王朝として日本列島を支配し、奈良朝政権に成長した」と主張する歴史の記述部分については、古代史の研究者の間で広く認められて、《定説》となっている。

私は『記紀』で主張され、古代史の研究者によって《定説》とされているこの歴史観を近畿王朝一元史観と呼んでいる。

この歴史観に対して、1970 年代に古田武彦さんが、日本の古代には「奈良盆地に生まれた近畿王朝」の他に「九州を本拠とする王朝」があったと主張された。古田さんは、九州に生まれた勢力が「卑弥呼」の国になり、「倭の五王」の国へ、そして「九州王朝」へと成長し、663 年に白村江で唐と戦って敗れるまで日本列島を代表したと見たのである。この歴史観は九州王朝史観と呼ばれている。

ところが、古代史を職業として研究する大学教授や公務員の学者の皆さんは古代史研究の世界に学会と言う権威を構築し、この学会で『記紀』の唱える近畿王朝一元史観を《定説》として公認し、九州王朝史観については取り上げず、批判もしないで無視する、という姿勢を採り続けている。

だから、九州王朝という言葉は教科書に載らない。戦後の 1965 年、中央公論社から「日本の歴史」シリーズが出て、古代を論じた井上光貞氏の『神話から古代へ』がベストセラーになって以降、大体 10 年おきぐらいに「日本の歴史」シリーズが刊行されているが、選ばれてこの「日本の歴史」を執筆するのは、定説派の中でも選りすぐられた定説派の学者であるから、もちろん九州王朝の語なんかに触れない。

だから日本の古代史に興味を持つ人でも、九州王朝史観を特別に勉強した人でない限りその内容を知らない。一般の皆さんは「九州王朝と言えば、一時、流行ったなあ」という位の感覚しかない。

〔2〕

私の場合、たまたま九州に神籠石のあることを知ってから、『記紀』の記す近畿王朝とは別に、九州を本拠とする勢力があったのではないかと思うようになった。もう50年以上前のことになるが、昭和39年(1964年)、東京神田の古本屋街で、神籠石(こうごいし)について書かれた戦前の本を見付けてからである。

私の育った大分県に神籠石は無かったから、それまで神籠石など聞いたこともなかったが、パラパラめくるうち、巨大な石垣で出来た水門の絵が目には焼き付いた。神籠石とは、九州の数か所と山口県にある古代の遺構で、長径が1m近い切石の列が標高300mからの山の一角を延々2、3kmにも亘って囲い、谷を跨ぐ処には、石垣で堅固な水門が造られているという。この本はこの遺構を、「神社の霊域を画する遺跡と見る説」と、「古代の山城であると見る説」があると解説していた。

私はこのような大規模な遺跡が日本にあったと知って驚いた。と同時に、これ程までに大規模な遺跡が、何故、古代史の世界で問題にされていないのか？ 不審に思った。

直ぐに文献を探し、鏡山猛さんの『北九州の古代遺跡』(1956年)に辿り着いた。他に、神籠石について書いている歴史書は一冊も見つからなかった。その鏡山さんも、『日本書紀』に載る大野城・基肆城は「朝鮮式山城」と把握していたが、『書紀』に載らないこれらの神籠石については、「山城のようであり、そうでないようでもある」と判断を保留されていた。

長径1mに満たない直方体の石を延々何キロと並べた処で、城の用は果たせない。しかし巨大な水門があるのは何故だ？ やはりこれは城ではないか？ それも破壊された城の残骸ではないのか？ 花崗岩を長径1mにも及ぶ直方体に削り、その切石を数千個も作って、山の斜面を高さ300mにまで運び上げ、延々3kmにもわたって並べるとなると、神籠石を一つ造る労力は200m級の巨大古墳を造る労力をはるかに上回るだろう。つまり、《神籠石》を造るためには、《200m級の巨大古墳》を造るとき以上の人が動員された筈であり、国家的事業であった筈である。それだけの労力を掛けて造るのであれば、やはり城以外にないのではないか？ とすれば何のためにこのような城が造られたのか？ 私は神籠石に入れ込んでいった。

調べ続けるうちに、「1962年に新しくおつぼ山神籠石が発見され、その後行われた学術調査で、切石列の後ろに幅9mの版築の土塁のあることが分かり、神籠石は山城と断定された」と知った。何のことはない、私が神籠石を知った1964年には既に山城と断定されていたのである。

しかし神籠石は何故か古代史の世界では問題にされない。だから私が「山城と確認された」ことを知ったのは何年も後だった。

後に、1970年代になると古田武彦さんが九州王朝論を唱えるが、古田さんの初期三部作に神籠石は出て来ない。古代史の研究界では神籠石は無視されていたから、九州王朝論を提唱した古田さんでさえ神籠石の存在を知らなかったのである。

こうした状況は今も同じで、教科書にも、「日本の歴史」シリーズにも神籠石は載らない。有名な学者は誰も著書に採り上げない。だから神籠石がある地元以外では誰も神籠石を知らない。

『日本書紀』は奈良盆地の近畿王朝が唐を警戒して、対馬の**金田城・水城・大野城・基肆城**から、

奈良の高安城まで11基の山城を築いたと記す。しかし、これらの近畿王朝が造った山城は、神籠石の特徴である《切石の列》を持たない。そして神籠石は九州北部、それも筑紫平野を中心に分布する。近畿王朝の本拠の奈良盆地にも、日本の他のどこにも神籠石はない。ということは、《神籠石を造ったのは九州の勢力、それも筑紫平野を本拠とする勢力だ》ということになる。

『書紀』は《自身の近畿王朝が造った城》と、《九州の勢力の造った神籠石の山城》をしっかりと区別し、《神籠石》は記さない。ということは、『書紀』はこの《神籠石》を造った九州の勢力に対抗意識を持っている、その存在を『書紀』の記す歴史の世界から抹殺しようとしている、ということになる。私はここまでたどり着いて身震いした。

《神籠石の規模と分布》は、《九州、それも筑紫平野に、それだけ大きな勢力が存在した》ことを示す。そしてこの事実は、『書紀』の《日本には奈良盆地に生まれた天皇家の王朝しか存在しないとする史観》をもろに否定する。それほど重大なことなのに、この神籠石は日本の古代史の世界では全く問題にされない。

何故か？ 私は不思議でならなかったが、直ぐに気付いた。

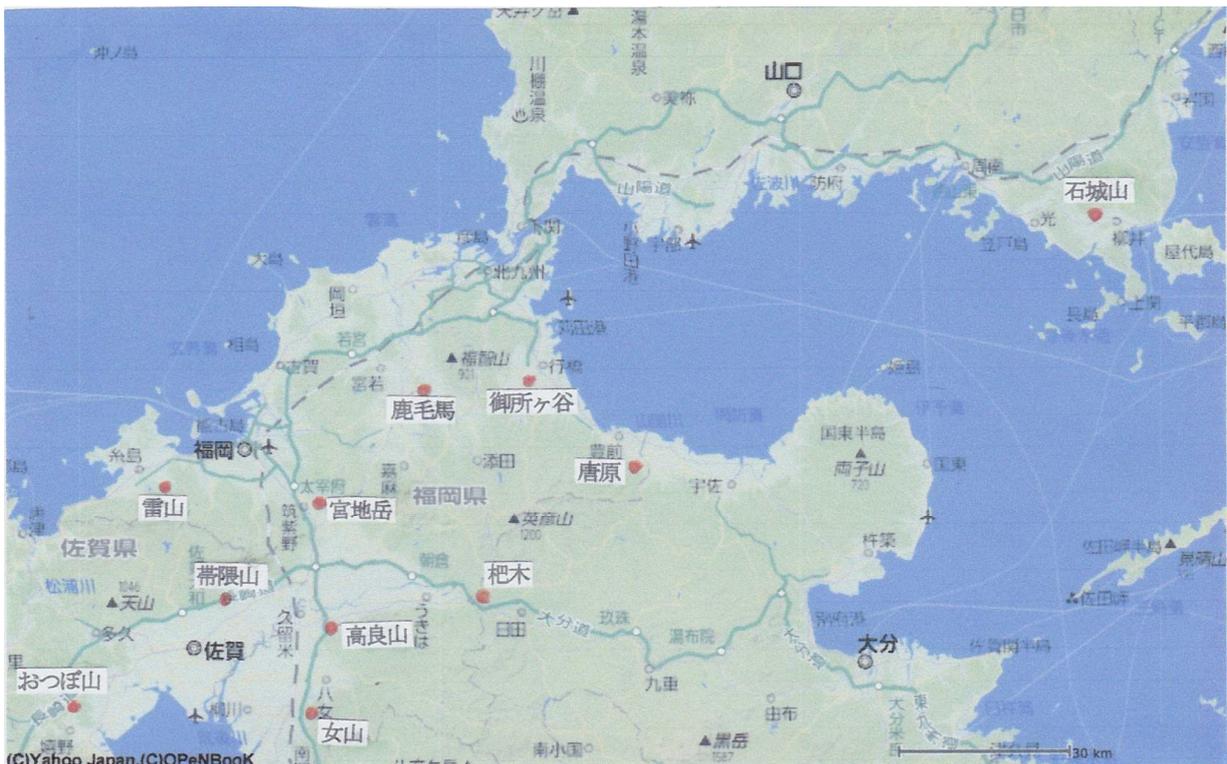
《神籠石の存在は、『書紀』の近畿王朝一元史観を否定する》。健全な精神をもってすれば、誰だってそう思うだろう。「それなのに、この神籠石が日本の古代史の世界で問題にされない」のではなく、「だから、問題にされない」のだ。

現代の日本の古代史の大学や公務員の学者も、『書紀』と同じ近畿王朝一元史観に立つ。しかし、その近畿王朝一元史観の中に神籠石を位置づけることが出来ない、だから、無視する。

私はますます日本の古代にのめり込み、『古事記』・『日本書紀』解説の世界にも入り込んだ。

[3]

お配りした地図は11基の神籠石の位置を示している(永井正範 作成)。



ではここで神籠石について現在分かっている事実を纏めておこう。

神籠石は、鏡山さんの本に載る 7 基の他に、おつぼ山(1962 年発見)、杷木(1967 年)、宮地岳(1999 年)、唐原(2000 年)の 4 基が発見され、全部で 11 基知られている。

この地図を見て、「奈良盆地に本拠のある近畿王朝が、その本拠の奈良盆地を守るためにこの神籠石群を造った」と考える人はいないだろう。

「筑紫平野に守られなければならない一大勢力がある。その勢力がその本拠を護るために神籠石を造った」、これは一目瞭然である。

耳納山脈の西の端の高良山の麓の台地に発達したのが久留米の町で、この背後の高良山に高良山神籠石がある。この高良山神籠石から筑紫平野の全体を見晴らすことが出来、ここが筑紫平野の中心であると分かる。

筑紫平野の東の日田方面からの入口を杷木神籠石が護る。筑紫平野の南の肥後方面からの入口を女山神籠石(ぞやま)が、筑紫平野の西の長崎・雲仙方面からの入口をおつぼ山神籠石が護り、これに加え、伊万里湾から武雄、唐津湾から多久を抜けて西から来る敵に備えて帯隈山神籠石(おぶくま山)が設けられている。そして博多湾から来る敵に備え、筑紫平野の北の入口を宮地岳神籠石が護っている。

筑紫平野の外では雷山神籠石が雷山の上にあつて玄界灘をやってくる敵を監視している。鹿毛馬神籠石(かけのうま)は遠賀川と英彦山川の合流点にあつて、響灘から遠賀川を遡って来る敵に備える。御所ヶ谷神籠石と唐原神籠石は瀬戸内海を東からやってくる敵に備えている。つまり《神籠石を造った勢力》は、《大陸・朝鮮半島から来る敵》に備えるだけでなく、《瀬戸内海を東から来る敵》に対しても備えている。もちろんこの敵は《近畿王朝》以外にない。山口県の室津半島にある石城山神籠石はその最前線となろう。御所ヶ谷神籠石は行橋から筑豊盆地に入る敵に備え、唐原神籠石は山国川を遡って日田から筑紫平野に侵入しようという敵に備えている。別府湾から、湯布院・玖珠を通り日田に抜けるコースは遠距離に過ぎるから、必ず、山国川から日田を経由するコースと採つただろう。この方が高低差も少ない。

さてここに面白い事実がある。一番新しく発見された神籠石は宮地岳(1999 年)と唐原(2000 年)の 2 基であるが、これも『記紀』に載らず、これまで発見された神籠石と同じ特徴を備えるから、発見当初から宮地岳神籠石、唐原神籠石と呼ばれてきた。ところが文化庁は、これまでは「～神籠石」の名で国の史跡に指定してきたのに、この新発見の 2 基は神籠石の語を外し、「阿志岐山城跡」、「唐原山城跡」として指定したのである。

私は「何故か?」、と双方の教育委員会に尋ねた。すると双方とも、「これは山城であつて、神籠石の言葉は相応しくない」、と同じことを言われる。私としては何を今さら……と思うから、「ならばこれまでは何故、神籠石の名で指定したのか?」と聞くと、「その名称は今後改められるだろう」、と同じことを言う。「では、《弥生式土器》はどうする? これも改めるのか?」と聞くと、どちらの教育委員会だったか忘れたが、質問には答えなくて、感情的になって突っかかってきたから話は止めた。

恐らく、近畿王朝一元史観を採る文化庁の担当者も、地元の教育委員会の担当者も、《神籠石の

規模と分布は九州王朝の存在を証明する」と理解するようになったのであろう。当たり前の神経で見れば誰だってそう思う筈……。私から見れば「神籠石は九州王朝の存在を証明する第一の直接証拠」である。「神籠石と聞けば、オウム返しに九州王朝が頭に浮かぶ」、という人も多くなっているだろう。だから、近畿王朝一元史観を採る文化庁は「神籠石の語は使いたくない……」、で、名称から神籠石を外した。ところが二つの地元の教育委員会の担当者は、「これが文化庁の決定である」とは決して口にしない。「自らの判断」であるかのように説明し、「質問する私を教育しよう」という姿勢で臨んで来る。

このように、「歴史の真実は何か？」を研究すべき世界においても、教育委員会の優秀な公務員は、《国の指令》に従い、《国の意向》を慮って動くようである。このようにして《国の意思》は全土に徹底されていくのであろう。しかし、神籠石の言葉を避けて片付く問題ではあるまいに……、何と呼び換えようが、《神籠石の特異な山城としての規模と分布》は一目瞭然に《九州王朝の存在》を証明する。今回のネーミングの変更は、漫画チックで愚か、と言うしかない。

〔4〕

私が、神籠石を知り、「九州に奈良盆地に対抗する勢力がある」と考えるようになって 15 年後の 1979 年、書店で古田武彦さんの『失われた九州王朝』を見つけた。初版は 1973 年に朝日新聞社から出ていたが、私が気付いたのは角川文庫から 1979 年に再版されたものの初版本だった。私はこの背表紙に初めて活字で「九州王朝」の語を見た。即、買い求め、古田さんの三部作と言われる他の二作も続けて読んだ。

古田武彦さんは、主として、《文献》の解説から九州王朝の存在を論証されており、この古田さんの論証によって私は、いよいよ、九州王朝の存在を確信した。

古代史の定説派の皆さんは今もこの古田さんの九州王朝論を採り上げず、論評せず、無視する姿勢を取り続けている。しかし、九州王朝論はもはや無視して済むレベルの仮説ではない。学者の皆さんが『記紀』の近畿王朝一元史観を採り続けるのであれば、「九州王朝はなかった」の証明責任が課される段階に来ている。言い換えるなら、「九州王朝は無かった」を証明しない学者に「近畿王朝一元史観」を語る資格はない。

さて、古田さんの三部作を読んで私は、「古田さんは神籠石をご存じない」と分かった。神籠石をご存じない処で、九州王朝の存在に辿り着いたのであり、勉強になり、かつ敬服もした。しかし、《神籠石の存在》は古田さんにお伝えしなければならない、私は資料と手紙の準備を始めた。

丁度そこで古田さんの新刊、『ここに古代王朝ありき(邪馬一国の考古学)』(朝日新聞社 1979 年)が出版され、古田さんも神籠石を知ったと分かり、手紙は出さずじまいに終わった。

古田さんに初めてお目にかかったのは 28 年後の 2007 年であったが、この時のことをお話ししたら、名刺を下さり、いつでも訪ねてきなさいと仰って頂いた。

以上、「私が九州に王朝ありと考えるに至った決定的証拠」として、神籠石を挙げた。この神籠石の一事をもってしても、日本の古代史の《定説》は書き改められなければならない。そして古田武彦さんの九州王朝論に出会ったことで、私は『古事記』・『日本書紀』の《文献》に目を開かれた。

しかし古代史の研究界では、学者の皆さんは依然として神籠石に目を瞑り、九州王朝の存在を考

慮せず、今もなお**近畿王朝一元史観**を《定説》としている。

では、今少し神籠石に関連する処で《問題点》を挙げてみよう。

[5]

『書紀』は、「九州は、天孫が降臨して以来、天神の直系である天皇を頂く近畿王朝の支配下であり、527年に磐井の反乱があったがこれも平定し、引き続き近畿王朝が支配下に置いている」と記す。新しい処では、推古天皇17年条の609年に『筑紫大宰』の語を載せ、664年・665年には『水城』・『大野城』・『基肆城』を造ったと記す。

日本の古代史の学者は、『書紀』の近畿王朝一元史観を《定説》としているから、

「九州に近畿王朝と異なる王朝の存在した」ことを認めない。

だから、『書紀』の記す663年に唐と新羅の連合軍と戦ったのは近畿王朝で、近畿王朝は確かに負けた」、

しかし、『書紀』を見ても、その後、唐とは友好関係を保っており、日本が唐に占領されたとは記していない。高句麗や、後の高麗のような属国としての扱いを受けたとも記していない」、

だから、『筑紫都督府』とは、近畿王朝の置いた『筑紫の大宰府』の唐風の呼称に過ぎず、『大宰府政庁』や『都府楼』の語も同義である、と見る。

しかし、『日本書紀』は奈良朝政府が自身の王朝を正当化するために近畿王朝一元史観に立って編集したもので、記述そのままを真実と見る訳にはいかない、「真実か、否か？」は吟味されなければならない。

唐は663年の白村江の戦いで日本と百済の連合軍を破ると、百済に『熊津都督府』を、筑紫に『筑紫都督府』を、新羅に『鷄林大都督府』を置き、668年に高句麗を滅ぼすと高句麗に『安東都護府』を置く。

では『都督府』・『都護府』とは何か？これは『書紀』に拠ってではなく、唐の歴史から把握せねばならない。唐は周辺諸国を戦いで破ると属国にする。つまり本国と同じ統治システムの中に組み入れる。その唐の行政府が『都督府』・『都護府』であり、戦いに敗れ、唐の属国とされた側から見れば、唐の占領軍本部ということになる。

だからもし、日本列島が近畿王朝によって統一されていて、近畿王朝が唐と戦って敗れたのなら、唐は近畿王朝の本拠である奈良盆地に『日本都督府』を置き、近畿王朝を属国にしたらろう。

「唐が筑紫に『筑紫都督府』を置き、近畿王朝の日本(やまと)が唐の占領を免れている」という事実は、『旧唐書』が記すように、600年代の日本列島には(倭国)と(日本国)の二つの主権国家があり、唐と戦って敗れたのは、九州王朝の(倭国)であって、近畿王朝の(日本国)は唐との戦いには加わっていなかったことを示している。

しかし、『書紀』は九州王朝の存在を知っていながら、これを無視して近畿王朝一元史観に立つ。だから、唐と戦ったのは近畿王朝だと記述せざるを得ない。ここの処は、『書紀』の近畿王朝一元史観を信じ、前提とする限り、《歴史の真実》は理解できないことになる。つまり、近畿王朝一元史観を《定説》としている学者の皆さんには、《歴史の真実》も、《『旧唐書』の記述が正しい》ことも理解できない。

ではこの処を九州王朝論の古田さんはどう見ておられるだろうか？

古田さんは、**大宰府**の歴史を 400 年代の九州王朝の「倭の五王」以来のものとして、「九州王朝の本拠は大宰府である」、と言われる。

また、「『書紀』の推古時代の 609 年の『筑紫大宰』の初見記事と、644・645 年の『水城』・『大野城』・『基肆城』設置の記事は、『書紀』が、九州王朝の事跡を近畿王朝のものとして剽窃したのである」、と言われる。〔『ここに古代王朝ありき(邪馬一国の考古学)』朝日新聞社 1979 年〕

この古田さんの仮説をそのまま受け入れる九州王朝論者は多い。その一人、内倉武久氏は、「大宰府は日本の首都だった」と主張される。これは古田さんの「九州王朝の本拠は大宰府である」の主張を言い換えただけである。〔『大宰府は日本の首都だった』ミネルヴァ書房 2000 年〕

しかし古田さんは、「大宰府が九州王朝の本拠である」根拠を挙げておられない。

まず、『大宰府政庁』の遺構であるが、現在の地表面にある礎石は平安時代の第Ⅲ期とされるもので、その下に奈良時代の第Ⅱ期の礎石が埋まっている。さらにその下に第Ⅰ期の堀立柱の遺構がある。古田さんは、明言はしないが、その主張からすれば、この第Ⅰ期の遺構を「倭の五王」時代のものと考えておられることになる。しかし、この第Ⅰ期の遺構は第Ⅱ期の遺構と関連を持っており、かつ第Ⅰ期の堀立柱の遺構には柱根が残っていない。つまり第Ⅰ期の遺構の柱は、腐る前に全て掘り出されて再利用されているのである。であれば、第Ⅰ期の遺構は奈良時代の第Ⅱ期から見てそれほど古いものではない。古田さんがこれを 200～300 年前の「倭の五王」時代のものと思っておられるのなら、それはあり得ない。

大宰府の地からは「都城の遺構」も、「推古時代の遺構」も、「倭の五王」時代の遺構も一切、発見されていない。九州王朝の本拠と見るべき遺物・遺構は一つも発見されていないのだから、大宰府を九州王朝の本拠とする理由は存在しない。

さて、『書紀』は近畿王朝一元史観に立つから、「唐と戦ったのは近畿王朝である」と言わざるを得ない。そして「確かに負けたが唐からは占領されていない」と言う。これは、占領されたのは筑紫であって、近畿王朝の奈良盆地は占領された記憶を持たないから、当然とも言える。

そして近畿王朝一元史観の建前からすれば、近畿王朝の配下にある筑紫が独自に唐と戦うことなどあり得ず、したがって唐に占領されることもあり得ない。だから、唐に対する防衛施設の『水城』・『大野城』・『基肆城』を整えた時期を 664 年・665 年と記していても、『書紀』の主張する歴史の整合性は崩れない。

問題は、「この『書紀』の近畿王朝一元史観を信じるか？」、「九州王朝があつて、唐と戦い、負け、筑紫が占領されたと考えるか？」、のいずれかとなろう。

定説派の学者は、近畿王朝一元史観を頭から信じているから、はなから筑紫が唐に占領されたとは考えない。しかし九州王朝史観に立つのであれば、「唐は筑紫からいつ撤退したか？」が問題となろう。だから、ここを説明しなければならないことになる。しかし九州王朝論の古田さんは、「列島の代表者が 663 年を境に九州王朝から近畿王朝に入れ替わった」とするだけで、「唐軍の撤退の時期」については言及していない。

つまり、日本の古代史の研究者の間では、「663 年に筑紫に『筑紫都督府』が置かれ、唐に占領さ

れた事実」についても、「その唐がいつ筑紫から撤退したか？」についても、一切、研究・分析はなされていらないのである。

この点について私は、別稿『壬申の乱の謎と筑紫都督府と大宰府』で分析した。しかしここでの問題は、「『大宰府』とこれを護る『水城』・『大野城』・『基肄城』を整えたのは、663年の白村江の敗戦の前か後か？」、つまり、「これを造ったのは九州王朝か、近畿王朝か？」に絞られるから、《唐の筑紫撤退の時期》については言及しない。

さて、11基知られる神籠石山城は、筑紫平野を守る形で分布するから、筑紫平野を本拠とする勢力が自らを護るために築いたと見るしかない。そして神籠石山城は、版築の土塁の外側に《切石の列》を並べるといふ特徴を備えている。『書記』はこの神籠石を記さず、『書記』の記す対馬の『金田城』・『水城』・『大野城』・『基肄城』から奈良の『高安城』までの11基の山城は、神籠石が持つ特徴である《切石の列》を持たない。

従って、『水城』・『大野城』・『基肄城』は九州王朝の造った神籠石ではなく、近畿王朝の造った城であり、これらが護る『大宰府』も近畿王朝が造ったと判断せねばならないことになる。以上、事は単純で明快である。

古田さんの場合、「大宰府は九州王朝の本拠である」と前提するから、「大宰府を護るために造られた『水城』・『大野城』・『基肄城』も九州王朝が造った」と言わざるを得なくなり、『書記』が大宰府とこれを護る3基の城を近畿王朝が造ったというのは、九州王朝のやった事績を剽窃したのだと、回りくどい説明をしなければならなくなる。

しかし、そもそもの古田さんの「大宰府が九州王朝の本拠である」とする主張には根拠が説明されていないから、納得性がない。だから上に私が纏めたように、「大宰府を護る3基の城は神籠石ではないから、近畿王朝の造った城である」、従って、「これが護る大宰府も近畿王朝が造った九州統治の本拠である」、ということになる。

[7]

さて、古田さんが1979年に、「大宰府は九州王朝の本拠である」と主張してから20年後の1999年に宮地岳神籠石が発見された。私は、九州王朝の本拠である筑紫平野の北の入口を護る神籠石のないことを長い間不審に思っていたから、やはりあったか、と安堵した。しかし、それは大宰府の地には無く、大宰府から丘陵地帯を南に超えた平野部を見下ろす宮地岳に有った。

この宮地岳神籠石の発見により、「大宰府は九州王朝の本拠ではない」ことが劇的に証明されることとなった。もし大宰府が九州王朝の本拠なら、これを護るための逃げ込み城の神籠石は、近畿王朝が大宰府の真上の大城山に『大野城』を造ったと同じように、大城山に造っただろう。大宰府を博多湾から来る敵の面前に晒して、はるか南後方の宮地岳に大宰府の住人とこれを護る軍人の逃げ込む神籠石を造る訳がない。やはり、「大宰府は九州王朝の拠点ではなかった」、「神籠石の特徴を持たない山城の『水城』・『大野城』・『基肄城』を造ったのは近畿王朝であり、この3基の山城によって護られる大宰府を造ったのも近畿王朝だった」、と証明されたのである。

しかし、九州王朝史観の皆さんは宮地岳神籠石発見の意義を理解されていないようで、「大宰府は九州王朝の本拠である」の主張を撤回されていない。古田さんの追随者も同様で、今も、「大宰府は日本の首都だった」と言い続けている。

このように、唐が筑紫の占領を解いて撤退し、このあと九州までの全権を握った近畿王朝は、これまで九州王朝が担ってきた九州防衛の任務を自らが担うことになる。そして、唐が日本列島に來襲した場合に備え、対馬の『金田城』、九州の『水城』・『大野城』・『基肄城』から、奈良の高安城まで、11基の山城を築く。では、「九州王朝が神籠石の山城群を築いたのはいつのことであつたらうか？」、次はここを考えよう。

中国は100年代の終わり、各地に軍閥が割拠して後漢の中央政府は事実上消滅し、その後589年に隋が全土を統一するまで400年に及ぶ長い分裂の時代を迎える。各地の軍閥はやがて魏・呉・蜀に集約され、三国が全国制覇をかけて争い、魏、そしてこれを引き継いだ西晋が280年に全土を統一する。しかし、華北に定住した北方遊牧民族も力を付け、中でも匈奴は西晋の領土を奪っていき、304年に「漢」を名乗る国を築いて、316年には西晋を滅ぼす。漢民族は華北を逃れて華南に東晋を立て、かろうじて華南を確保する。漢民族不在となった華北には北方遊牧民族の五胡が押し寄せて互いに争う(五胡十六国時代 304～349年)。これを鮮卑族の北魏が統一し、華南で東晋に代わった漢民族の宋と、全国制覇を掛けて対峙する南北朝時代になる(439～589年)。

中国のこの分裂の時代は他国を侵略する余裕などない。だから周辺諸国にとっては安穩な時代であつた。そして、『書記』によればこの時代、近畿王朝は朝鮮半島に渡り、伽耶と百済に肩入れして新羅・高句麗と争っており、日本側に、中国や半島の勢力が日本を侵略することを警戒する節は見られない。

『宋書』には、この時代、日本列島の五人の王の朝貢したことが記されている。「倭の五王」は中国の正統と見る南朝の冊封体制に入って、半島での活動を有利に展開しようと考えたのであろう。近畿王朝一元史観ではこの「倭の五王」を当然に『書記』の近畿王朝と見るが、『書記』は「倭の五王」について一切、語らない。九州王朝史観では「倭の五王」は九州王朝で、朝鮮半島に進出したのも九州王朝と見、『書記』の記す近畿王朝の半島への進出は、九州王朝の事績の剽窃と見る。

しかし、「倭の五王」が近畿王朝であれ、九州王朝であれ、大陸・朝鮮半島からの九州侵略など警戒していない。だから、博多湾からの博多の平野の背後に『水城』や『大野城』のような城を築く必要など感じていないし、それに護られた山陰の狭苦しい大宰府の地に九州統治の政庁、九州王朝史観であれば首都を置く必要など感じていなかったらう。九州王朝の王なら、広大な筑紫平野のどこか広々とした処を首都にしたらう。

なお、「倭の五王」が九州王朝の王なら、中国南朝の宋に朝貢するとき、どこから出港したかをフィールドの視点で見ておこう。私は博多湾からではなく、肥後の宇土半島から船出したと考えている。博多湾から出港して、五島列島の間を複雑な海流と潮流に逆らって航行する必要はない。宇土半島の古墳には、マストと多くの櫂を持つ船の線刻画が多数見られる。ここには航海に長けたと思われる首長たちが葬られている。こうした宇土半島の首長たちが、「倭の五王」の南京の宋への渡海の任務を担ったのであろう。

有明海は水深が浅く、今も沿岸には小型漁船の入港できる港しかない。これは意外とご存じない方が多いようだが、有明海に大型船の入港できる港はない。現在、有明海で大型船の入港できる最北の港は福岡県大牟田市の三池港であるが、ここも明治になって干潮時に港の入口に設けた水門

を閉じて水深を確保する方式を導入し、初めて大型船の入港が可能になったのである。

私は、「倭の五王」の時代も、宋へ向かうときは陸路を宇土半島まで行き、ここで大型船に乗ったと考えている。

もちろん、朝鮮半島に干渉する際は、博多湾から松浦半島までの沿岸を出港地としただろう。663年に白村江へ渡る際も、玄界灘に面した港を利用した筈である。古田さんはこのとき有明海の港から出港したと言われるが、膨大な数の船と戦闘員が、わざわざそこまで手間のかかる遠回りルートを取る訳がない。それ以前に、そもそも有明海は多数の兵士を運ぶような大型船は航行できないし、多数の船を係留するような港自体が無い。

さて、北朝の隋が589年に南朝の陳を滅ぼして中国全土が一つに纏まると事態は一変する。610年、隋は流求(沖縄)を蹂躪し、続いて高句麗に何十万の兵で三回も襲い掛かる。高句麗はこれを皆、退け、隋はこの遠征の失敗で民心を失い滅亡する。しかしこの後618年に自立した唐も、中国全土を統一すると、630年に北の**東突厥**、635年に西の**吐谷渾**(とよくこん)、640年に**高昌**(ウイグル)を滅ぼして属国にする。

「こうなると次は朝鮮半島が危ない」、百済だけでなく、高句麗・新羅も後方(日本列島)の憂いを無くそうと九州王朝に接近して来る。そして九州王朝も唐の侵略に備える。「九州王朝が神籠石の山城群を整備したのは、610年の流求の悲劇を聞いた以降のことである」、と私は考えている。

九州王朝論の古田さんは、「500年代初めの磐井の時代から長期間を掛けて整備した」と数百年の期間を想定しており、「いつ、どこの国に対して備えたのか?」の分析はない。

そして600年代後半、いよいよ唐は朝鮮半島に現れる。半島では**新羅**がうまく立ち回って、唐と連合することにより、唐からの攻撃を免れる道を選ぶ。**九州王朝**は無謀にも唐と新羅の連合軍を相手に戦う道を選ぶ。660年に先ず**百済**が唐に滅ぼされて半島から消える。663年、九州王朝は白村江で全面敗北し、日本列島の歴史から消える。近畿王朝はうまく立ち回って唐との戦いに加わず、無傷で九州までの日本列島を統一する。668年、あくまでも戦った**高句麗**もついに唐に滅ぼされて半島から消える。結局、朝鮮半島では、唐と連合した**新羅**の一人勝ちとなり、676年、唐が半島から全面撤退し、新羅が半島を統一する。

唐の軍隊が日本から去り、近畿王朝が日本列島の全権を握ると、近畿王朝が初めて自らが九州防備の責任を担うことになる。そこで、対馬の金田城から奈良の高安城まで、11基の城に拠る防衛網を築く。博多湾からの唐の再来に対しては、『水城』・『大野城』を設け、これに守られた山陰に九州統治の本拠として『大宰府』を設ける。

大宰府の歴史は近畿王朝によって初めて開かれたのである。

[最後に]

以上、私は、**神籠石**から日本の古代をフィールドからの視点で捉えて、九州王朝に辿り着いた。

ところが**神籠石**は、日本の古代史を職業として研究する大学教授や公務員の学者の皆さんからは完全に無視され、教科書に載らず、話題にも上らない。これは、≪**神籠石**の存在が九州王朝の存

在を証明する」からであり、古代史の学者の皆さんが「定説」としている**近畿王朝一元史観**と相容れないからである。

つまり、「定説」を採る学者の皆さんは、「**神籠石が九州王朝の存在を証明する**」と知っている、すなわち、「**近畿王朝一元史観は成り立たない**」と知っていることになる。だから、**近畿王朝一元史観**を採る大学教授や公務員の学者の皆さんは、ただただ神籠石に目を瞑り、神籠石を無視する。

こうした大学教授や公務員の学者の皆さんは、

「このまま神籠石に目を瞑り続けるのか？」

それとも、「目に見える通りに神籠石を見据えるか？」

一人一人の姿勢が問われている。それを問いかけるのがこの論考である。

私たちはこうした学者に関わりなく、自ら考え、「**古代の真実**」を求めていく。

私たちは、先入観に煩わされることなく「**神籠石**」を見、「**神籠石**」もまた、「**古代の真実**」を覗かせてくれる「**古代への扉**」であることを知った。

先入観に捕らわれた大学教授や公務員の学者が私たちに、「**古代への扉**」を開いてくれるのではない。

そして今、私はこの「**九州王朝はあったか？**」の問題を考えると、「**魏志倭人伝における短里**」、「**九州年号**」、「**隅田八幡宮人物画像鏡**」もまた、「**古代の真実**」を覗かせてくれる「**古代への扉**」であると考えている。これらについてもこれから皆さんと共に考えていきたいと思う。

以上は、『筑紫古代文化研究会』2016.6.28 の例会での話を纏め直したものである。

(2016.8.7 修正)

なお、古田さんが「『書紀』の推古時代の 609 年『筑紫大宰』の初出記事を九州王朝からの剽窃であると捉えている」については、この論考で触れなかったが、私も同様に考えている。

『書紀』の『大宰・総領』についての私の指摘と解釈は、2014 年の久留米大学『公開講座』における「**神籠石についての講演**」で述べさせて頂いた。この久留米大学における「**神籠石についての講演**」も、いずれこの HP に載せたいと思っている。